

菩提樹

発行所 尾寺空
〒625-0010 舞鶴市松尾心
西国29番松尾心
編集発行人 松尾心
TEL(0773)62-2900
FAX(0773)62-2028

舞鶴「静坐の会」
4月より11月の
第3水曜日
舞鶴トラベルにて
PM1時より

上田先生の書簡

(歩々仏々)

徒歩巡礼の会（アリの会）が発足したのは昭和六十二年十一月四日のことで、爾来平成二十三年に至るまで私は大畧西国巡礼五周をはじめとして四国遍路等々七千軒の道を歩むことができました。

当初、西国三十三所一巡の体験記録を、「西国札所古道巡礼母なる道を歩む」と題して、発刊、偶々上田閑照先生にお送りしたところ、次の便りをいただきました。

拝啓

御無沙汰のまゝになり申訳ありません。先日は、まことに貴重な御本『西国札所古道巡礼』を御恵与いただきましたことに有難うございました。有難うございましたというだけでなく、一歩一歩と一キ口、山あり谷あり、岩あり、川あり、それと「一歩歩めば一歩の仏、二歩歩めば二歩の仏」と仏々歩々の行道、深く感銘感動致し、尊いことと礼拝致しております。

私の方なんか元気には致しておりますが、何か一年中師走のようで、しかし、師走の声を聞きますとやはり年々歳々の感慨が湧いて来ます。とは云え十二月二十三日にもなると感慨どころではなく、たゞ走り走っているという感じです。そのような中で、又しても大兄の佛々歩々、歩々仏々が思われてきます。

同封、印象深い経験をしたものですから、こんな文章になりました。くれぐれも御大切に、よいお年を 敬具

南無観世音菩薩

上田閑照 拝

一九九二年十二月二十三日

そして、文面にある印象深い経験が誌された、信濃毎日新聞文化欄「人生の時間」の切り抜きが同封されていました。その最終節は次のように終わっています。

「人生の一生ということをよく思うようになった。友人の死に会う機会が重なって来たこともあるが、私自身それ相応のよわいになり、自分の生きてきた歳月が一つの限りあるいのちの持続として、一つの一生として感じられるようになってきたからであろう。

親しい人たちの死に面して、その度ごとに、こゝにこうして横たわっている彼のこの世のものならぬ静けさに打たれ、死に逝くことよつてのみ行くことのできる遙（はる）かな遙かな遙けさを感じつつ、同時に、こうして生きていくことの不思議さを感じる。「どこから生まれ、どこへ死に行くのか」という問いが、大きく疑問符を打ってその余韻のように、生きていくこの事実への感嘆のように静かに響いている。」

因みに、本文は横浜での小学校の同窓会が、卒業後五十数年して催された時の感懐から筆が起されています。

実は、私も巡礼の同行者に、昭和十六年に小学校を卒業した三人の友人がいて、四人ともども白衣に身を包んで行を共にし、苦楽を共にすることができた尊い経験があり、この上ない

懐しい思い出が重畳してきます。残念ながら三人は他界し、孤り残された我が身にとつて、上田先生の御指摘は痛い程身に沁みるものがあります。

ともあれ、先生の「歩々仏々」の言葉を使わせていただいて、アリの会の御詠歌を作ってみました。

ありがたや 観音慈悲を
御杖として 歩々仏々の
念いかさねつ

蛇足ではありますが「かさねつ」は、一笠一杖の旅の笠に懸けた詞であります。

附記

京都大学名誉教授（宗教学）上田閑照先生は大正十五年のお生れで、日本宗教学会々長、学士院会員、文化功労者、その他の要職をつとめられ、昨年御他界になられた。

拜啓

御無沙汰のまゝになり申訳ありません。先日は、まことに貴重な御本『西国札所古道巡礼』を御恵与いただきましたことに有難うございました。有難うございましたというだけでなく、一歩一歩と一キ口、山あり谷あり、岩あり、川あり、それと「一歩歩めば一歩の仏、二歩歩めば二歩の仏」と仏々歩々の行道、深く感銘感動致し、尊いことと礼拝致しております。偶々上田閑照先生にお送りしたところ、次の便りをいただきました。

拝啓

御無沙汰のまゝになり申訳ありません。先日は、まことに貴重な御本『西国札所古道巡礼』を御恵与いただきましたことに有難うございました。有難うございましたというだけでなく、一歩一歩と一キ口、山あり谷あり、岩あり、川あり、それと「一歩歩めば一歩の仏、二歩歩めば二歩の仏」と仏々歩々の行道、深く感銘感動致し、尊いことと礼拝致しております。

南無観世音菩薩

上田閑照 拝

松尾心空 謹

一九九二年十二月二十三日

京都府指定文化財 本堂・仁王門 修復事業

当寺の本堂と仁王門は、建立（享保十五年、一七三〇年）以来、二九〇年を経て、改築の時期を迎えております。

開山（和銅元年、七〇八年）以来、幾度も災厄に見舞われましたが、今日の建物は、正徳六年（一七一六年）の火災の後に再建されたものであります。

毎年、雪害に悩まされる当地では、雪による建物の負荷は殊の外甚大で、その都度、修復を重ねて参りました。また、昭和の初め、両建築ともこけら葺きを銅板に替えましたが、九十年を経た今日、修理の都度裏面に御寄進の方の芳名を拝見するたびに、改めて数多い方々の御志によって、観音様を護持する建物が守られてきたことを痛感いたします。

取りあえず、今年六月末より仁王門の修復（約九千弍百萬円）にかゝり、明年末完成の予定で、本堂は令和四年より着工の予定であります。

現下、予期もせぬコロナ禍の蔓延、それによる経済の沈滞等、さらでだに諸事低迷の時代ではあります。有縁の皆様方の御支援を心よりお願い申し上げます。

山主 松尾象空
前任 松尾心空

樹 提 菩

熊野古道にまつわる「虎杖」考

平成元年の熊野古道は、世界遺産の選定をうけた今日とは、その様相を一変しています。道中出逢う人とてなく、処によつては道に生い繁った竹や木の枝を、先達の新宮山彦グループの二人の方に切り拓いてもらって進まねばならぬ箇所もありました。道には「りんどう」が群集して咲いていました。

以下は、平成元年十一月一日、午前六時二十分、那智山青岸渡寺を出発して三時間、地蔵峠に到着して以後の記録であります。

さて大雲取越えで標高の最も低い(七百二メートル)地蔵峠(茶屋)到着が九時二十分、出発からの里程は八、七キロ。熊野古道案内のパンフレットの予定通り、三時間きっかりの行程である。ここでは大雲取地蔵尊三十三体を拜む。三十三観音になぞらえての数であろうか。

この間かなりの山坂を経てきたが、更に八百七十メートルの越前峠をめざす。里程は二キロ。若い亮英師(青岸渡寺・副住職)は、私を気づかかって常についていて下さる。

「ナム・カンゼオン・ボサー」と区切りつつ、吸う息、吐く息を調えようとするが、いつしか猛暑の折の犬のような息づかいになる私に、「大丈夫ですか」としきりに声をかけてもらう。紀伊のくに 大雲取の峰ごえに一足ごとに わが汗はおつ

と、斎藤茂吉の歌碑をみたのが九時三十分のこと。最高の越前峠登口にさしかかる地点には、かもしかの糞が落ちていた。

虎杖の おどろが下をゆく水の たぎつ速瀬を

むすびてのみつ

長塚節もこの地で喉をうるおしたのである。

そしてここへくるまでには、茶屋跡の名称が数多く連なっている。その多くは峠の名を冠しているが、登立、粥餅、地蔵、石倉等々の茶屋で、巡礼者が杖を休めて、湯茶や、甘酒、餅などで疲れをいやしたものである。我々は専ら、キャラメルやみかんである。

ところで、前記長塚節の和歌についてであるが、私は「虎杖」を地名であろうと記していたところ、国語学の泰斗、阪倉京大名誉教授からお便りをいただいた。

〔前略〕：ちようど今週の始めに小生も熊野古道(ごく一部)を歩いてきたので、特に興味深く拝読しました。先人の汗と涙がしみこんだ道と思うと感慨一入でした。

「虎杖」は「地名であろう」とさされていますが、これは「いたどり」です。長塚節も、いたどりの咲く初秋のころ、ここを通ったのでしよう。(ただし俳句の季は春になっています)：(後略) というのである。「虎杖」を地名としていた私は、何とも気恥ず

かしく、一方自分の書いたものを読んでいただいた上、御教示までいただいたことを嬉しく思ったが、その後、「いたどり」の読みが、かなり一般的であることを知って、改めて赤面した次第である。

ところで、当地のじつこんにしている俳人に、訂正かたがた電話をしたところ、何とも思わぬ読んでしまったが、これを地名としたのは明らかに間違いである。しかし、実はこの地名も全国に五、六ヶ所あるはずで調べておく、との返事であった。この方からは、後日大略次のような便りをもたらした。

全国くまなく調べたら、もつと出てくるかも知れない。関東、東北地方にあるかと思つたが意外になく、また近畿以西はまだ調べていないが、私の知つたのは次の通りである。として

1、板取村。長良川が美濃市から二つに分かれているが、西側に分かれているのが板取川で、その上流に板取村がある。なお、この一帯の谷を、いたどり谷ともいう。

2、板取。福井県今庄町、国道三六五号線、栃ノ木峠を越えて今庄町に入ったところにある(古くは虎杖と書いた、いたどりの沢山生えていたことによる)。(角川地名辞典)

3、板取。長野県松川村、国道一四七号線の沿線、大町市の少し南にあるJR大糸線の、しなのまつかわ、に近いところ、虎杖と書いた。(同)

4、いたどりしんでん、板取

新田。三重県大宮町、詳細は不明。

以上、こんなことを調べてみるのも面白いものです、と結んであった。ところで、昨年十一月十六日の『京都新聞』には、次のような記事があった。

児童数が二人で、京都府内随一の小規模校、京都府竹野郡丹後町立虎杖小学校は、来春、明治二十三年以来の百年の歴史に幕を閉じて廃校となる、というのである。この学校は、天然鮎のそ上で知られる宇川上流の山間部にあるというが、やはり虎杖の自生の多いところなのであるか。

その後、巡礼の途中、このことを話題にしたところ、虎杖についていろいろな通称が出てきた。一般にはスカンポ、和歌山の新宮ではゴンパチ、広島ではタチンゴ、或いはタチンボという話であった。虎杖にも種類があつて、長塚節の歌つた虎杖が、これらの俗称のものと同じであるか否かは、後日に託することとする。

さて、次は高知県、室戸の出身の友人の話である。この地方では、たらの芽や虎杖などといった野の味わいになじんだものであるが、特に虎杖と淡竹を砂糖漬けにしたものを、村人たちが売りに来る。それを買って喰べた少年時代の味覚は今以て忘れられない、という。また、奈良県吉野郡野迫川の民俗で、虎杖をさつとゆがいて皮を剥き、薄塩で炊く。これを食膳に出された時、虎杖である由を指摘したところ、お客さんで分つたのは、あなた

が初めてです、と逆に驚かれた

といった話。

一方、諸橋轍次の『大漢和辞典』をひいた、当地の医師からは、ファックスが入った。「三才図絵、草木巻九に見ゆ、杖は其の茎を言う、虎は其の斑をいうなり」と。

また東京在の義兄に電話をすると、長塚節の歌集をもつており、これは明治三十六年の作品で、彼は十二年の生れだから、二十四歳の時の歌である、とのことであつた。ついでながら、先日、百歳の高齢で亡くなった、アララギ派の歌人、土屋文明と斎藤茂吉、そして武藤善友の三人が、昭和十四年に、熊野古道を歩んだ由のことも伝えると、長塚節の歌集とあわせて、文明の歌のコピー。茂吉の歌は筆写してそれぞれ送ってくれたので、抜粋する。

真熊野の 熊野の浦ゆ てる月の ひかり満ち渡る 那智の滝山 人みなの見まくの欲れる 那智山の 滝見るがへに 月にあへるかも 「さらに小雲取峠といふにかる、(以下略)」 真熊野の山のためけの 多芸津瀬に 濡れ濡れさける 虎杖の花 土屋文明 「放水路」 ま熊野や 昔平清盛が ゆきけむ道も あれにけるかも

草の下に 或いはかくるる 石の道 千年の苔の おろそかならず 幾世の人 幾世かさねし 足跡の上に 我が一日の 足跡の消ゆべし

斎藤茂吉 「歌集 ともしび」 熊野越 其一 やま越えむ ねがひをもちてとどめなく 汗はしたたる 我が額より この山は いやいよさびしく なるらむか 焚火をしたる 跡さへもなし 熊野越 其二 紀伊のくに 大雲取を越ゆるとて 二人の友に まもられにけり ゆふばえの 雲あかあかとみだりつつ 熊野の灘は 夜にわたりぬ これらの歌から察してみると、昭和十四年には、熊野古道は正に潰れる運命にあつたことが分かる。現今の文化庁の肩入れがなかったら、とつくに通れぬ道となつていたであろう。

ついでながら、これはまた随分次元の低い話になるが、虎杖の読みの下らなかつた無知のてれ隠しに、落語も一言。 虎杖とは、阪神タイガースのバットではあるまいか、と……。 このように、いろいろな触れ合いが、歩行に於てのみならず、紙上を通して、また歴史の上にも広がりをみせてゆくところに、徒歩巡礼の興趣は尽きないのである。